

粉は正常であるというのが気になる。ツツジ属の種類同士を人為的に交配すると、鱗状毛を持たない群同士では比較的容易に交雑するが、鱗状毛を持つヒカゲツツジ亜属と鱗状毛を持たない他の亜属との交配は、不可能ではないが交雑しにくい、ましてもっと縁が遠いと考えられるハコネコメツツジとの交雑は、現在の技術からすれば人為的には可能であろうが、自然では雑種形成が起こる可能性は極めて低いのではないかと思う。

ヤマツツジはどこでも変異が起こるだろうけれど、特に変異を起ししやすい場所がある。サタツツジのある大隅半島、ミカワヤマツツジのある高帥原（豊橋付近）、これらの場所では花色や花型など様々の変異株が見られる。東京では現在は施設が立って無くなってしまったが、村山貯水池の脇の100m四方ほどの場所に、花の色変はもちろん、重弁、采咲などやたらに変異個体が出る場所があった。神津島も小型の花のできる変異地域ではないだろうか。コウズシマヤマツツジといっても、花もごく小さいものからかなり大きいものまで様々であり、その中で小形のものを特にコウズシマヤマツツジと呼んでいる。薩南諸島の中之島

のマルバサツキは、花や葉に大小の変化があり、その変異は遺伝的なものであることが調べられている（山口 聡、未発表、元農林省野菜試験場久留米支場、現静岡野菜茶業試験場）。ここにはマルバサツキ以外のツツジ亜属の種類は存在しないから、雑種である可能性は少ない。コウズシマヤマツツジほどの小さな花のものは見つからないが、類似した現象であり、コウズシマヤマツツジもオオシマヤマツツジの変異の一種と見てもよいのではないだろうか。特に花粉が全く正常であることはそれを示していると思う。

ツツジ属の中には難しいことは言わなくても、どうしても交雑種としか考えられないものも沢山ある。しかしハコネコメツツジとの雑種となると、慎重な証明が必要である。葯の構造の調査は欠かせない。これを欠いては、雑種であるといっても証明にはならない。また現在ではDNAやアイソザイムでの解析の方法もある。結果はどうあれ、此等の方法でコウズシマヤマツツジの研究をより深める努力をしていただきたい。

（東京大学理学部附属植物園）

#### アサマフウロについて（山崎 敬）

Takasi YAMAZAKI : On *Geranium hakusanense* Matsumura

アサマフウロは福島県白河、長野県浅間山麓、静岡県富士山など本州中部の高原に生育する希少種であるが、種類としては九州北部、朝鮮、満洲にも分布する。九州のものは変種ツクシフウロ var. *kiusianum* Haraとして区別されるが、朝鮮、満洲のもの、本州のものは区別できないとして、同じものとして扱われている。しかし両者を比較すると、朝鮮、満洲のものは本州のものより葉が細裂している。原寛氏は本州にも細裂するものがでてくるので区別できないとしているけれど葉の形が異なっている。これらの葉は5片に大きく裂けるが、アサマフウロではこの裂片が中部以下で楔形になって次第に細くなり、基部の幅は(2.5 -) 3-5mmである。葉が細裂するものでもこの形

は同じである。一方、朝鮮、満洲のものは裂片の中部で急に狭くなり、楔形ではあるけれど、上部でやや内側に曲がっていて、基部の幅は2-3.5 mmである。両者の間には差異があるので、変種関係で区別しておくのがよいと思う。ツクシフウロの葉は楔形の上部が湾曲しないものもあるが、多くは湾曲し、基部の幅も狭く、ほぼ、朝鮮、満洲のものに類似する。ただ後者は葉の裏面は脈上のみ毛があるのに、ツクシフウロは裏面全体に毛があるのが異なる。ツクシフウロの方が大陸のものに近い形なので、従来のように、九州のものが、朝鮮、満洲と本州のものから分離したと考えるより、まず本州のものが分離し、次に九州と大陸のものとの間に分離が起こったと見る方が妥当

であろう。

アサマフウロを変種とする場合、学名としては *G. hakusanense* Matsumura の名を基準として組み替えを行わねばならない。アサマフウロが分布していないのにどうして白山の名が使われたのか、その経緯を知らずにこの学名をいじると混乱を起こすし、その混乱は現在でも続いているので、その辺のことを明らかにしておく必要がある。

松村先生は 1901 年に、大渡忠太郎氏が浅間山とその近くの御代田で採集した標本をもとに、アサマフウロを新種として発表した。その際 *G. hakusanense* と名付けたのである。それは飯沼愨齋の草木図説にあるハクサンフウロの図と記載が、これと同じものだと判断したことによる。したがって和名はハクサンフウロとして特別な名を付けなかった。将来同じものが白山でも見つかるだろうと考えていたわけである。牧野先生は愨齋の草木図説を改定した際 (1912) にもハクサンフウロにこの学名を使っている。しかしその後牧野先生は愨齋の図は *G. yezoense* の一種でないかと考えるようになった。愨齋がハクサンフウロと書いた標本が科学博物館に保存されているが、図に描いたものと同じという愨齋の書き込み記事があり、現在のハクサンフウロ *G. yezoense* var. *nipponicum* である。しかし牧野先生は *G. hakusanense* がアサマフウロであることには気が付かず、*G. yezoense* の変種として var. *hakusanense* (Matsum.) Makino の組み合わせを行った (牧野, 日本植物図鑑: 398, f. 1194, 1940)。現在のハクサンフウロ var. *nipponicum* はアカヌマフウロとして別に記述した。ここからハクサンフウロとアカヌマフウロとは同じものか別物かという問題がでてきた。

牧野の言うハクサンフウロはアカヌマフウロと異なるものであることは、牧野図鑑に描かれた図からも明らかである。この図はアサマフウロであり、脇に添えられた果実の図は、現在のハクサンフウロ即ちアカヌマフウロである。このことは原寛氏がすでに指摘している (日本種子植物集覧 3: 5, 1954)。*G. hakusanense* Matsumura は 2 枚の標本から記載されたが、標本と牧野図鑑の図とを比較してみると、花を付けた図は御代田の標本の一部を描いたものであることがわかる。牧野図

鑑の作成過程から考えると、本田正次先生が標本を選んで画工に描かせたものと思われる。したがってアサマフウロそのものである。牧野図鑑を改定した新日本植物図鑑 (1961) は原氏も関係していて、フウロソウ科は同氏が担当したと思うが、事実を承知していた同氏は、牧野先生の見解を変更せずにそのままにしてある。ところが改定増補版 (1989) ではハクサンフウロとアカヌマフウロとは同じものだと、同じ学名に変更してしまった。*G. hakusanense* を *G. yezoense* var. *nipponicum* の異名とするのは、この本が初めての見解であるが、原寛氏の研究や、同氏による *G. hakusanense* の異名としての扱い方など全く無視した乱暴な処置である。同図鑑のハクサンフウロの下に描かれているアカヌマフウロと、右に描かれているアサマフウロとを比較すれば、ハクサンフウロの図はアカヌマフウロよりアサマフウロによく似ていることは明瞭である。ただ添えてある果実の図は花柄に立毛が描かれているから、アカヌマフウロであろうと思われる (増補版では印刷がつぶれていてわかりにくい、1940 年の初版では毛が明瞭に描かれている)。草木図説のハクサンフウロは上にも述べたように *G. yezoense* var. *nipponicum* であり、アカヌマフウロと同じである。松村・牧野のハクサンフウロは *G. hakusanense* に基づくので、現在のアサマフウロであって、これにハクサンフウロの和名を使うのは適当でない。しかし学名は var. *hakusanense* が使われることになる。学名の組み合わせはすでに北川氏によって行われている。

*Geranium soboliferum* Komarov var. *hakusanense* (Matsum.) Kitagawa, Neo-Lineam. Fl. Mansh. 419(1979).

*Geranium hakusanense* Matsumura in Bot. Mag. Tokyo 15: 123(1901).

*Geranium yezoense* Fr. et Sav. var. *hakusanense* (Matsum.) Makino, I II. Fl. Nippon 398, f. 1194(1940), excl. fig. fr.

*Geranium soboliferum* Komarov sensu Hara, Enum.Sperm. Jap. 3: 5(1954), p.p.

Distr. Japan: C. Honshu.

Hab. Fukushima Pref.: Shirakawa-cho, Takayama (T. Saito, Sept. 23. 1940, no. 2714, TI); Nishi-

shirakawa-gun, Nanko (N. Satomi, Jul. 9, 1950, TI). Tochigi Pref. :Nasu, Kobukabori, Shitsugen (H. Hara, Sept. 1, 1957, TI). Gunma Pref. : Kanra-gun, Shimonida-cho, Kouzu-bokuzyo (T. Satomi, Sept. 25, 1960, TI). Nagano Pref. :Asama (C. Owatari, 1894, Holotype, TI);Miyoda (C. Owatari, Aug. 12, 1894, Paratype, TI); Karuizawa, Minami-karuizawa (H. Hara, Oct. 1, 1945, TI); Yatsugatake, Nobeyama-Akadake (K. Sato, Aug. 5, 1961, no. 3048, TI); Matsubarako (S. Ito, Sept. 1919, no. 42, MAK); Suwagun, Hara-mura (Z. Sato, Aug. 26, 1983, TI); Kirigamine, Kurumayama, 1750, (M. Togashi, Sept. 1, 1967, TI); Higashi-chikumagun, Katadate-mura (H. Kubota, Sept. 9, 1949, TNS). Yamanashi Pref. :Kita-komagun, Ohizumi (Y. Naoe, Sept. 8, 1969, TNS); Kitakoma-gun, Kiyosato, Utsukushimori-yama 1300m (J. Murata, Aug. 10, 1975, no. 606, TI). Shiga Pref. : Ika-gun, Nishi-asai-mura,

Ohura (H. Katsumata, Aug. 1918, MAK).

牧野日本植物図鑑の増訂補遺の誤りにふれたが、ついでにもうひとつ誤りを指摘しておこう。イチゲフウロの学名が *G. sibiricum* var. *glabrium* となっていることである。これは前の版では変種名が付いていなかったのに、変種名を加えたものである。変種にする必要は無いと思うがここでは論議しない。間違いは var. *glabrium* としたことである。原氏は *G. sibiricum* f. *glabrius* として書いたもので、大井氏がこれを変種に変更した際も var. *glabrius* (Hara) Ohwi としている。 *Geranium* なので *glabrium* としてしまったのであろうが、*glabrium* という言葉は存在しない。増訂補遺は短時間で作られたので、こうした誤りが出るのだと思う。ほかにも少しだが誤りがみうけられる。もっと時間をかけてじっくり改定できる環境であったらと残念に思う。

(東京大学理学部附属植物園)

Abdur RASHID<sup>a, b</sup> and Hideaki OHBA<sup>a</sup>: *Cardamine sinica*, A New Name for *Cardamine heterophylla* Cheo et Fang (Cruciferae)

*Cardamine heterophylla* Cheo et Fang の新学名 (A. ラシッド・大場秀章)

Cheo and Fang (1980) described *Cardamine heterophylla* from China. This is a later homonym of *C. heterophylla* (G. Forst.) O.E.Schulz from New Zealand published in Bot. Jahrb. 32:487 (1903).

The species described by Cheo and Fang (1980) is distinguished from *C.heterophylla* (G. Forst.) O. E.Schulz by the tri- or quinquefoliate radical leaves, the approximately 12 cauline leaves, the always quinquefoliate basal, the trifoliate middle leaves and simple upper leaves. It is clear that the species is distinctly different from *C.heterophylla* (G. Forst.) O. E. Schulz in morphological characters and distribution.

This chinese species resembles *C. hygrophylla*, *C. anhuiensis* and *C. tanakae* in having suborbicular leaflets with irregular obtuse, dentate margins and

divergent venation and makes a natural group together with these species.

*Cardamine sinica* Rashid et H. Ohba, nom. nov.

*Cardamine heterophylla* Cheo et Fang in Bull. Bot. Lab. North-East. Forest. Inst. 6:27 (1980); Cheo, Fl. Reipubl. Pop. Sin. 33:206 (1987). Type: Sichuan Sheng: Nanchuan Xian, Daheba, (K.L. Chu 6034 on 13 July, 1938-HN, not seen).

周太炎と方瑞征が(中国四川省から)、記載した *Cardamine heterophylla* はマルバコンロンソウや中国の四川・広西省の *C. hygrophylla*, 安徽省の *C. anhuiensis* に近縁な1種である。残念ながら先行名があり使用できないので、*C. sinica* なる新名を提唱した。

(<sup>a</sup>東京大学総合研究資料館,  
<sup>b</sup>ペシャワール大学植物学部)